

令和7年度秋田県放課後児童支援員等資質向上研修 研修レポート抜粋

(誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります。)

県北会場

科目 ①障害児の支援 発達障害のある子どもの理解と対応

- ◆ 支援が必要な子どもが増え、子どもの状態像が多様化してきています。発達障害のそれぞれの特性をより理解し、その特性に応じたかかわりを工夫することがとても大切だと思いました。できる、できないだけでなく、一緒に向き合うこと、折り合いをつけることが必要です。放課後児童クラブでは、支援が必要な子どもたちに支援員同士が援助できるように工夫し、子どもたちが周りとのどんな関係を築いているか見守っていきたいと思います。
- ◆ 発達障害のある子どもの多くは聴覚よりも視覚からの情報が入りやすいため、絵カード等を駆使して指示を出すのは共通認識の範囲内であったが、一方で視覚的刺激に苦しむ子どもがいる、というのは新しい見解であった。情報は入りやすいだろうが、強制的に情報が入り、子どもが本当に言いたいこと、思っていることが言えず、ためてしまう可能性があるというのは恐るべき状況だ。指示する側の都合ばかりを優先させてはならないと感じる。
- ◆ 今は障害のある子どもと障害のない子どもが自然と遊べる共生社会です。しかし障害のある子どもは他者とコミュニケーションをとりたいが見通しがつけられず周りに合わせるのが苦手です。支援員は、子どもの味方になり見方を変えてプラスの側面に目を向けることを積み重ね、「したいけどできない」の矛盾は子どもが成長するうえで大切なので、心の揺れに寄り添い、気持ちを共有し、一緒に折り合いをつけ見守ることが大事だと学びました。
- ◆ これまでの研修等で見通しを立てられる支援については学んでいたが、それによって遊びに苦しめられてしまうケースもあることを初めて知った。援助者に都合の良い支援ではなく、個々に合わせた支援をすることが大切であると感じた。また、支援の必要性に関わらず、心の揺れに折り合いをつけることに慣れていないのではないかと感じる児童も多い。児童の心に寄り添い共感し、時には信じて見守りながら個々の成長につながるような支援を行いたい。
- ◆ 発達障害のある子どもは、他の子どもに比べ感覚が過敏だったり、特定のこだわりが強かったりするため、日常生活の中で苦手なことが多いが、その子を取り巻く環境や周りの人たちの優しい対応によって、様々な問題が見え隠れして気づかないことがあることを学んだ。子どもの発達はあることの積み重ねのため、他の子と比べできないと感じるより、できることを増やしてあげることの方が大切と学び、子どもの心を信じる必要があると分かった。